

菊地清明氏（元外務審議官）に聞く

# 平常心で外交をやる人

―聞き手・阿部 穆



石油増量交渉が不調に終わったメキシコ訪問。ロベス・ポルティーヨ・メキシコ大統領主催歓迎晩餐会で挨拶する大平外相、右端は志げ子夫人（1980年5月2日）

## ブリリアントであつた大平外交

——大平さんの二度目の外務大臣は昭和四七年（一九七二年）で、ちょうど一回目の外務大臣を昭和三七年（一九六二年）に引き受けられてから一〇年後のことです。その大平外相の下で菊地さんは経済協力局長、シンガポール大使を経て、次は大平総理を補佐するサミットのシエルバでもある外務審議官を務められるわけですね。

菊地 第二回目の外務大臣の時ですけども、これはやはり日中国交正常化に渾身の力を込めてやられたんだと思います。七四年になると日中航空協定の大仕事があります。これも随分、難交渉だったんですけども、ちゃんとまとめられた。だから、日中国交正常化、日中航空協定というのが全部、田中角栄首相ですから、その功績ということになっていますけれども、実質的にこれをやったのは、大平外務大臣であつた、ということが言えると思いますね。そういう意味では、第一次の外務大臣の時と違って、第二次の外務大臣の時には非常な実績を挙げられたと思います。それには、第一次の外務大臣の二年間の経験というのが、かなり役に立ったんじゃないか、という気がします。それから、やはり「日中問題は日中問題だ」「日中関係は日台関係だ」というような物の考え方ですね。何と云うか、問題を巨視的に見るというか、ないしは問題を相対化するというか、そういう見方というのは、やっぱり大平外交の特徴じゃないでしょうか。あんまりきりきり舞になつて、その一点に集中するというのじゃなくて、いろんな側面から多元方程式的に物事を解決して行く、というのには大平外交と云うのは非常にブリリアントであつたんじゃないかと思えますね。

——一〇年前に秘書官をされておられて、一〇年後に経済協力局長だった。どんな感じですか。

菊地 最初は大平さんは外務大臣、その次は大蔵大臣としてお仕えしたんですが、殊に大蔵大臣の時は、私が経済協力局長になってましたんで、海外経済協力案件については大蔵省との連絡が多いものですから。これは公式に外務省の経済協力局長が大蔵大臣に話しに行くというのは勿論できないわけですけども。いろんな私的に会うような時には、いろんなお話を伺う機会もあつたわけですね。その時の一つの話としては、例えばその頃、外務省の経済協力局としては、日中関係で中国に對する何か無償援助をしたいということが出てきて、それで例の日中友好病院の話が出て、本当に初期の初期の段階ですけどね。私が関係したのは、ほんの私的な会合で大平さんに、こういう話が出ますよといった時には、彼は全面的にサポートしてくれましたよ。

——その後、今度は大平総理時代に外務審議官として補佐されるといいますか、あるいはベネチア・サミットのシェルパとして、補佐されるわけですけども……。東京でやったサミットの時は菊地さんじゃないのですか。

菊地 私はシンガポールにいました。

——東京サミットでは原油のシーリングの問題は、フランスのジスカールデスタン大統領が最初から非常に強硬で、なかなかまとまらなかったという話ですが、どういう事情があつたのですか。

菊地 国広道彦君が東京サミットの裏方をやったので、サミットが終わった途端に、シンガポール大使の私の所にきましてね。その時には私が次に外務審議官になって、シェルパになるということが分かつていたせいでしよう、いろいろ説明してくれたんです。ですから、かなり事情が分かつている

実積りですが、あれは、今から思えば、日本のちょっと思い過こしたったんじゃないかと思うんですね。あの時は、ちょうど第二次石油危機の時ですから、日本は朝野を挙げてエネルギー資源確保というこ  
華とで、ある程度、きりきり舞っておったわけですし、通産省としては当然、職掌柄、これから経済成  
去長を遂げなければいけないのに、原油の輸入を制限されちゃいかんということで、かなり熱心でした。  
あの時は通産大臣は江崎真澄さんだったんじゃないですか。非常に張り切って、通産省の事務当局

も、絶対、低いシーリングは呑んじゃいけませんというようなことを言われて。大平さんとしても、  
第一次オイルショック、第二次オイルショックをあげて、やはり日本の資源問題というのは、かなり  
アキュートに感じておられたんですね。ですから、これは大変だということで、相当、深刻に捉えた  
んじゃないかと思うんです。

——助け舟を出したのは、アメリカのカーター大統領だったようですね。

菊地 助けてもらったのは、その前の年から非常に親しくなっているカーター大統領ですね。カー  
ター大統領との親密な関係で、急場を救ってもらった。議長として兎に角、一応の結末をつけられた、  
ということではないかと思うんですね。その他に、もう一人ヘンリー・オーエンという人がいました  
ね。これはカーター大統領のシェルバだったんですよ。ホワイト・ハウスのエネルギー担当の特別補  
佐官で、大変な学者でしてね、エネルギー問題に詳しい人でした。この人がかなり助太刀をし  
てくれて、カーター大統領もかなりエネルギー問題に詳しい人ですから、オイル・ステートのジョー  
ジア州出身ですから。やはり前の年から培ったカーター大統領との友好関係が、非常に手助けになっ  
たんじやないですかね。その後、八 年の会議を経て、また大平さんが亡くなった時には、わざわざ

葬儀に出席してくれたということがありますね。

——東京サミットの翌年ですね、総理が亡くなるのは。その年のベネチア・サミットに、日本の総理が出席できるかどうか各国とも悩んだし、実際には亡くなられて、日本は大來佐武郎外相が首相代理になるのですが、その時の各国の日本に対する態度はどうでしたか。

### ベネチア・サミットのシエルパとして

菊地 カーター大統領をはじめ、各国首脳が亡くなられたことを惜しんで下すつたんですが、あの時、佐藤嘉恭秘書官が大平さんの遺影をベネチアの町からちよつと舟でいくサン・ジオルジオ島まで持ってきました。それで確か黙禱をしたんだと思います。ただ、あの時、ちよつとソ連のアフガニスタン侵攻がありましたね。それからサミット開催の直前に、ソ連が物すごい外交上の手を打ったのですよ。それはソ連がアフガンから撤兵するという声明を出したのですよ（実際は撤兵しなかった）。全くサミットに対する攪乱戦術です。それで、サミットが開かれたら、最初からジスカールデスタン大統領とかヘルムート・シュミット首相とかいうのは、その問題を論議しようと言い、そうなっちゃったのです。その他に中東問題がありまして、ベネチア・サミットというのは、のつけから非常に政治的議論が多くなって、実際、経済サミットとして始まったものが、政治問題をかなり広範に議論するようになったのは、ベネチア・サミットからではないのかというのが、私の説なんです。

——大平総理は最後までサミットには出席したい、という意向だったようですが。

実 菊地 大平総理としては最後までベネチア・サミットには行きたい、という気持ちを持っておられ  
就 たようで、伊東正義官房長官と相談して、佐藤秘書官を派遣して、今の言葉でいう、バリアがどのく  
華 らいあるかということを下見させる方針を内定していたわけです。しかし、最後の段階では、こうい  
去 うのを見ると、やっぱり選挙のほうももっと大事だなというように変わったようですね、それ  
でもサミットに関しては非常に重要視していたんじゃないか。私はシエルバとして、一九八一年の一  
月から二回ぐらい事前のシエルバの会合があったので、そのたびに大平総理への報告に官邸に伺  
つたんです。総理が非常に歓迎してくれましたね。「おい、どうだった」という話で、非常に喜んで  
聞いて下さったんですが……。

——大平総理への報告というのは、大体どんな話だったのですか。

菊地 私が一つだけ言ったことは、次のようなことです。サミットはそもそもジスカールデスタン大  
統領の発案で、経済サミットとして世界経済の問題を議論し合う、特に一九七五年の段階では通貨問題  
をもっと議論しよう、その次にはエネルギーの問題を議論しようということから始まったものです。基本  
的にはマクロエコノミー、マクロ経済を議論しようというのが、経済サミットのそもそもの主旨であっ  
たわけです。しかし、だんだん政治問題が出てくると、さっきみたいなアフガンの問題、中東の問題が  
出てくる。あの時はコムの規制問題、これが非常に重要な問題になりましたね。ドイツがソ連の天然  
ガスに依存する度合いが、どんどん強くなる、天然ガスのパイプラインを敷くという話がありまして、  
それを援助することがココム違反かどうかということになりましたね、ココム規制の問題が非常に大き  
な問題だったですね。それは、政治と経済の接点の問題ですけども、いずれにせよ、政治問題がだんだ

ん出てきて、この傾向に関して、われわれシエルバの間では、やはり各国の首脳が集まる以上、われわれは経済の問題だけを議論するなんていうことは到底、言える話ではないと。やはり、その時々クルーシャルな問題、肝要な枢要な問題を議論するというのが、サミットの課題ではないかというようなことに意見が収斂しつつありましたと。以上のようなことを大平総理に言ったのです。

——すると総理は……。

菊地　そしたら大平さんが手帳を出して、「ああ、そうか。クルーシャルか」と言った。あの人は言葉が好きですからね。クルーシャルという言葉をノートにとめてたことを、私は記憶しております。私がシエルバとしていろいろ活躍している時も、アメリカの相手はヘンリー・オーエン氏でしたけれども、彼がいるんな強い、きつい提案をするんですけれども、その時も私は「あなたがよく知っている大平総理は、そういう提案は呑まないであろう。そういうことは合意しないであろう」というようなことを言うと、もう彼は大平さんを尊敬してますから、「ああ、そうかな」と言って、銚を収めるような状況が何回かありました。そういう意味では、私は出席されなかった大平さんのシエルバとして、非常に恩恵を受けたということですね。

——菊池さんが外務審議官をされている時、大平総理の晩年ですが、メキシコを訪問されて石油交渉が不調に終わったことがありましたね。

### 石油交渉が不調に終わったメキシコ訪問

菊地　私が外務審議官の時ですけど、メキシコに原油の輸入を一〇万トンバーレルから三〇万トン

実　パーレルに増やしてくれという交渉、あの頃、「油乞い」だと言われたんですけども、あの時も大來（佐武郎）外相が前座を務めて非常に難交渉だったですね。あの時のロベス・ポルティエ大統領は華　私はその後、メキシコ大使になって行っただけですけど　非常に姿勢の高い人でしてね。それから、オーテーサさんという石油大臣みたいな人がいて、メキシコは産油国ということで、日本、何するものぞと威張っていたわけですよ。

——あの時、田中六助さんが、すごく怒って「総理がくれれば何とかする」という連絡があったから、じゃ行きましようと言われて行ったが、何にもならない。「俺は外務省に八メられた」と言っ、えらく怒っていたですよ。

菊地　その時、大平さんは石油乞い的なことは全然、言わないわけですよ。それは前もって、大來さん、田中六助さんが下ごしらえしてますからね。むしろ返事を聞くだけのような体制になっていたわけですね。ところが、向うからはそういうことを言い出さない。ですから、これは決裂ですよ。ただ、これは私は大平さんが立派だと思っんですよ。総理が行って、交渉が決裂するなんて、普通の総理はやりませんよ。外務大臣でもやらない。大体、何とかまとめようとする。そこは、大平さんは平気なんですよ。「いや、こんなもんだよ」と平気なんですよ。毀誉褒貶を気にしないんですよ。何だと、外務大臣のくせにまとめなかつたのかとか、総理大臣のくせにまとめなかつたのかとか、そういう口上は彼には絶対、通用しない。

——メキシコ相手の交渉は厄介でしたね。菊地さんは、そのあとメキシコ大使を務められるわけですが……。

菊地 それでね、ちょっとメキシコの話の余談になりますけれどもね。この時にスペイン語の通訳をしたのは、伊藤昌輝君というスペイン語の達人で、私のメキシコ大使の時の参事官になった人ですがね、彼に聞いてみたんですよ。「あの時、大平さんはどうだったか」と。私は外務審議官で訓令を出していたほうなんですがね。「君、大平さんは本当に油乞いをしたのか。一〇万トンパーレルを是非とも三〇万トンパーレル・デイにしてくれということ、ポルテイト大統領に頼んだのか」と聞いたんです。そしたら、彼は「いや、そういう話は出ませんでした」と言うんです。これはね、おそらく記録にも一切、残っていないと思う。それは、記録にはおそらく大平さんが行って、そういう交渉をしたことになっているわけです。

——それは面白いところですね。

菊地 とつても面白いんだよ。大平さんというのは、そういう何と何とかな、国の品位を落とすようなね、何と言うか、相手を見て、相手が非常に威張っているような場合には、こういう人に頼む必要はないと。だって事前に交渉しているわけだから、返事さえ聞けばいいわけですよ。返事がこない以上、もうこれはしょうがないと。まあ恐らく、向うの話の中に無理だと、ないしはあの時、たしかメキシコはね、日本は三〇万パーレルに増やしてもらえらるなら、鉄鋼借款を一〇〇万ドルだけ出しますと、それをメキシコ側は増やせ、と言ってきたのですよ。それはね、全然、予備交渉の中に何も出てこないことですから、大平さんがその場でウンなんて言えるはずがないわけです。

——いきなり吹っかけてきたんですか。

菊地 ええ。

実 — それは非常に興味深い話ですね。

就 菊地 私は、その話を聞いてね、大平さんが言わなかったということは、物すごく立派だと思うのですよ。だって、メキシコから三〇万バーレルこないからといって、日本の経済がもう駄目になるわけでも何でもありませんからね。現に東京サミットの時に輸入目標六三〇万バーレルと六九〇万バーレル・デイの間で大平さんが血の小便を流すような思いをして取ったものも、結局、最後の輸入実績は五〇〇万バーレル・デイを切ったですからね。あれは全く通産省ペースに乗せられたわけですよ。

— 菊地さんは外務省で経済局、経済協力局など経済外交の畑が長かったわけですが、その間に大平さんに関して印象的なことがありましたか。

### 最高輸出会議での大平英語

菊地 大平さんは、佐藤内閣で通産大臣になった時も、民間主導型ということを言って、通産省の役人を驚かせた、シヨックを与えたということがあります。大平さんが最初に外務省にきた時には、はっきりとした期日は忘れましたが、最高輸出会議というのが、その頃にあったのですよ。その時に経団連でやったんですけれども、経団連へ行く車の途中で、勿論、外務省の経済局がスピーチの原稿を用意してあるわけです。ただ大平さんはああいう人ですから、あんまり見ないですよ。それで、車の中でいろいろ考えているんですね。それで私に向かって、「菊地君、俺は今日、何を言ったらいいのか」と言うんですね。それで私は外務省では経済局が長いものですから、経済外交と称す

るものに対しては、いろいろ考えることがあつたんですね。これはいい機会だと思って、ちよつと私の意見を申し上げたのです。

—それはどういふ内容ですか。

菊地 私が言いましたのは、日本はよく経済外交ということを書いて、外務省も挙げて経済外交みたいなことをやっている。しかし現実に現地の大使館に行きますと、現地には各商社、各メーカーとかの代表が皆いるわけですね。その国の政府といろいろ交渉して、あの頃はまだ輸入制限が盛んな時ですから、輸入ライセンスを下してもらうのに、その国の政府に日参するわけです。ところが日本の大使館というのは、現地にいる商社、メーカーが、その国の政府に対していろんな申し入れをする時に、援助しないことになつていゝるんですよ。つまり、ある商社のために、政府が動くということはないんだ。しかし私自身は、これはおかしいと思うと。たしかにA社とB社が競合している時に、A社とかB社を応援するのは間違つていゝる。しかし、一社だけという時には、応援をしてもいいじゃないかと。現に私はパキスタン大使館で若い書記官でしたけれども、例えば鉄鋼の輸入ライセンスを下してもらうのに、相手はステイル・コントローラーという役人なわけです。その役人に頼みに行くのに、やっぱり大使館から行けば、これは本物だと思つていいですよ。ですから私は行きました。これは政府の訓令も何もなかつたけれども、私は自分の判断でやりました。現に、他国の大使館を見ると、全部、それをやつていゝるんです。だから、私は日本がこれをやつちやいけないわけはない、と思つてやりました。しかし、実はこれは「闇」なんです。　　ということをやつたんですね。

実

——すると大平外相は……。

就 菊地 そうしたら、大平さんが何か大変に気に入ったらいいですよ。それで、最高輸出会議に行つたら、最初から、そういう話をするわけですよ。「そういうことがあるらしいけれども、在外公館と  
華 いうものは総力を挙げて、そういう商社、メーカーの対外経済活動を、輸出活動を援助すべきだ。そのために、この輸出会議なんてあるんじゃないですか」というような話をされた。その時に、ちよつ

と、これも大平さんの英語好きの話の二環になるんだけれども。「その時、私はそうやりましたけれども、煮え湯を飲まされたこともあります」と。というのは、ある商社から頼まれて、商社の言い分をそのまま繋いで入っていったら、相手は「あなたは大使館を代表してそんなことを言うけどね、全然、あなたの言うことは違うよと。この商社は、こういうことをやっているんだよ」というようなことを言われ、物すごく赤恥をかいたことがありますと……。

——大平さんの英語好きというのは何のことですか。

菊地 ですから、「商社が大使館に頼んでくる場合には、必ず大使館に全貌を言つて、自分にとつて有利な事情も不利な事情も全部、言つてこないと困ると。『ホール・ツルース』、全真相ね、そうしないと、相手が自分より余計、事情を知っていたらね、全く面目丸潰れになる。だから『ハーフ・ツルース』では困る、『ホール・ツルース』を教えてもらおう」という話をしたんです。そうしたら、大平さんは、英語をそのまま使つて、最高輸出会議でやっていました。それが一つ。これは、ちよつと私の自慢話みたいになつて恐縮なんです、そういうことがありましたね。

——ビルマ賠償の再検討交渉というのもありましたね。

## ビルマ賠償再検討条項の交渉

菊地　そうです。ビルマ賠償・再検討条項というのがありまして、それに対して日本がフィリピンとかインドネシアとか賠償が済んだので、もう一回、再検討条項を引用して、再検討してもらいたいということ、ビルマからアウン・ジー將軍　アウソサンの同僚です　がきて交渉したんですよ。その時は、白金の外相公邸へ行きまして交渉したんですが、これも、さっきの大平さんの外交交渉の実例なんですけれども、結局、まとまらなかつたんですよ。相手は納得しないし、大平さんも受けないということ。帰りの車の中で、「どうもあの人は軍人らしくて、経済のことは解らん。自分がいくら説明してやっても解らん。今の一億ドルは、一〇年後の二億ドルぐらいに相当するんだよ。だから、こういう問題はビルマ側から見れば早く貰ったほうがいいんだ」とつまり、利子の觀念が大平さんにあるわけです。帰り途、私は大平さんに、「どうもこれは大臣らしくないですね。特にビルマに追加賠償を払うことに関しては、国会に関して全然、異論がないはずなんです。社会党だって、ビルマに援助することに関しては、何ら問題になりませんよ。国会で問題にならないようなことを、まとめないというのはないと思う」と、はっきりと言ったのですよ。そうしたら、大平さんは「そうか、それならアジア局にやらせろ」ということになって、結局、一億四〇〇万ドルが何かでまとまったんですがね。それがもう一つ。これは意外と知られていないんですがね、ビルマ賠償再検討条項というのを発動したんですが、比較的大きなことですな。

——そうすると、菊地さんのアドバイスもあって、この交渉は中途半端に終わるんじゃないやなくて、決着がついたということですね。

菊地 それから、大平さんの外交交渉のやり方で一番感心しているのは、日中航空協定交渉でも一九八一年のメキシコとの石油の増量交渉でも、大平さんは理屈にならない譲歩はしない人なんですよ。普通の政治家みたいに足して二で割るとか、相手が小国だからとか、相手が後進国だからとか、逆に相手はアメリカだからといって、日本の政治家はほとんど譲る癖があるのに、大平さんは無闇に譲らない人なんですよ。理屈に合わないことは全然やらない。そういうと例えば大平さんは対イラン経済制裁とか、対ソ連モスクワオリンピックのボイコットとかを譲ったじゃないかと言っけれども、あれは日本の経済的利益には直接、関係がありませんからね。しかも、それはアメリカのほうが大事だということ、原理上、譲っているわけで、主義に基づいて譲っているんであって、主義に基づかないで相手が言うことを利かないから降りる他ないという譲り方は全然しない。だから、通産大臣の時の繊維交渉でも、大平さんが一番、強かったですよ。だから、佐藤栄作総理に嫌われたわけです。それから、日中の正常化交渉はうまく行ったのですが、航空協定交渉のほうは、国広君が書いてますけれども、あの時はもう腹をくくっちゃったんです。最後にお別れの挨拶、口上を言い始めたんです。そうしたら相手が慌てて、別室にかまえていた周恩来総理の所へ行つて、結局、折れたということなんです。

——お伺いしたいことは、これで大体終わるのですけれども、菊地さんは一九六二年から一九八一年まで二〇年近い年月、直接、間接に付き合われたと思うんです。菊地さんの見ておられる大平正芳

という人は、どういうふうな人でしたか。外務省との接点として、例えば考え方であるとか、あるいは方法論であるとか、いろいろあると思うんですけども、人間・大平正芳というのをどう捉えていますか。

### 人間・大平は複雑系の人で分かりにくい

菊地 私は、大平さんのことを論ずる資格がどのくらいあるか知りませんが、ただ長さの点においては、やっぱり一九六二年から亡くなるまで一八年間ですか、陰に陽に、また直接、間接に聳咳に接した者で、殊に秘書官という立場からプライベートな面、ゴルフのお付き合いとかが、宴会での同席とかが多いわけですけども、そういうどっちかというとならぬ大平さんというものを一八年間にわたって 勿論、シンガポール大使の二年間、それから五六年から七一年まではドイツとワシントンにありましたから、その点は抜けていられるわけですけども 　ただ長さからいえば割りと長いほうですので、そういう面ではちょっと僭越ですけれども、お話させていただきたいと思えます。

一つは、大平さんを見る場合には、何か時期的にある程度、区分して考えたと分かり易いのではないかと思います。大平さん自身は、ある意味で複雑系の人ですから、分かりにくいですよ。私は正直に言って、分かりにくい人だと思いますよ。

—— 時期的に区分して考えると分かり易い、といえますと。

菊地 例えば、外務大臣になるまでの期間、つまり代議士に出られてから、池田さんの軍師という

実 かと参謀になられて、官房長官をやつて池田内閣の組閣をやられたという、それまでの期間が一つです  
就 ね。それから六二年から七一年までの期間。これは外務大臣、政務調査会長、通商産業大臣を経て宏  
華 池会会長になられる、佐藤内閣になつて辞める期間ですね。それから、七一年の四月以降、総理にな  
るまでの期間。それから殆ど連続なんですけれども、総理になられてからと。これは、区分があまり  
去 はつきりしないのですけれども。

しかし、人の見る眼は、だんだん違つてくると思うんですね。そういうことで、私なりに考えてみま  
すと、最初の第一期は、かなり池田さんの分身というか腹心というか、ないしは池田派の大番頭とい  
のと、それからこれは今、あまりいい言葉じゃないけれども、この頃アメリカの政治で非常に流行して  
いるスピナーとかハンドラーという言葉がありますよね、政界の根廻しというか、池田派を支える大  
黒柱というような感じ。つまりどつちかというと裏方的な存在、偉大なる政治家というよりも、参謀の  
段階がそれだと思ふんですね。この段階では、私はいろんなことが言い得ると思ふんですね。この時に、  
大平さんの最大の功績というのは、池田さんというものを「寛容と忍耐」というような合言葉で、日本  
の国民に受け容れられるような、アクセクティブな総理にした、ということですね。そういう意味では、  
私は池田内閣を支えた大黒柱的な意義というのが一番、大きいんじゃないかと思ひますね。

——それが第一期ですね。そして第二期に入る……。

菊地 その次の時代は、私はゲーテじゃないんですけど、レールヤーレ、ある学習の時代だと思ひ  
ます。このころ、ラーニング・カーブという言葉がありますが、ある程度、政治家としての裏方から  
表方に、非公式の場から政治家への道を歩み始めた。その第一番目の歩みとして、外務大臣という

ストをこなした。この段階では、まだ外交に関する大抱負、大経綸というものを持って出てきたというよりも、問題処理型というか戦後処理型というか、そういう問題が出てきたら、それをうまく解決するというような型、どちらかというリアクティブというか、受け身型、問題解決型という態度を取られたんじゃないかと思うんですね。ですから、その間に日韓請求権問題の糸口は付ける、しかし解決までは行かない。それから周鴻慶事件とか、クラレのビニロンプラントの問題とか、つまり日中、日台の狭間にあつて、その間を破局まで行かないように処理して行く、というような時代だったと思うのですね。

——第三期は七一年以降というわけで……。

菊地 大飛躍を遂げるのは、やっぱり一九七一年からじゃないかと思うのですね。「流れを変えよう」というパンフレットを出した段階から、一生懸命、今までの思想をまとめて いままでには人生哲学みたいなものが多かったんですが、それを今度は実際の政治哲学、外交哲学と、それから世界政策というかそういうもの、ある意味で戦略的な思考を加味したような問題に取り組み始めた。それで、いろんなグループをつくつて、本当に思想をまとめて行つた、ということではないかと思ひますね。ですから、その段階では、その前の段階までは、一応、バランス・オブ・パワーとかいう普通の外交のオーソドックスにしたがつて外交問題を処理し、かつ戦後処理というものをずっとやるわけですけども、そこからもっと積極的に、大平さんの言葉を借りれば、「国際政治のインサイダー」というような形で、それからバランス・オブ・パワーの論理を超えて新しいビジョンとは何かという、そういうちょっと世界政治に対するビジョンというものを展開し始めた時じゃないかと思うの

実  
です。ですから、その意味では、大平さんというのは、そういうふう  
に脱皮して行くというか、就  
生々發展した人ではないか、というような気がします。私は、たまたま一番、最初の段階で、いろん  
な大平さんの人間味というものを知っているだけに、やはりあれだけ成長して行ったというのは、も  
のすごいことだと思いますね。

——傍で見ておられて、考え方とか、あるいは英語の使い方とか、その辺はどうだったのですか。

大平さんは英語とジョークが好き

菊地 考え方は、大平さんは、人生哲学としてはどっちかと言うと、儒教倫理型というよりは老荘  
型、それから対決型とか二者択一的な考え方やなくて、もっと現実を直視するというか、私の言葉  
で言うとザツハリツヒ（即物的）に、物を見るところのような人、それからあらゆる事態に処して、大  
騒ぎもしないけど、無視もしない、過大評価もしないし、過小評価もしない、というような考え方と  
いうことです。ある人から見れば、何となく頼りないというか、曖昧だというような感じを与えるか  
もしれませんけれども、大平さんとしては、そんな絶対なんてあり得ないと、絶対に良いもの、絶対  
に安全なものなんてあり得ないと。大平さんの言ったことで非常に感心したのは、「日本は非常にバ  
ルナラブル（脆弱）だと言うけれども、どの国だって皆なバルナラブルじゃないかと。それは程度の  
差があるだけで、完全に安全な国なんて、どこにもないんだよ」というようなことですね。だから物  
事を相対化する、何か一歩さがって物を見るということですね。

——よくジョーク、冗談も言っていましたね。

菊地 大平さんという人は、非常に自分を犠牲にしたジョークをよく言いましたね。「私は、ご覧のように全く風采が上がらない方ですけども」とか何とか、よく言いますけども、これは村松増美君（同時通訳者）なんかよく言うんだけども、自分を犠牲にした、自分を馬鹿にした冗談を言う。これ英語でね、セルフ・デプリケイティング・ジョークと言うのです。これはちょっと余談になるけれども、英国紳士というのは、最大の特徴は何かという、その一つは自分で自分を馬鹿にすることだ、自分を嘲笑するような言葉を吐ける人、これがジェントルマンと言う。「こういう不細工な男でございませう」という言葉が巧まずして、大平さんから出てくるわけですよ。あれは、最高のインテリの証左なんです。私は、イギリスのそういうことを知っていましたからね。「ははあー大平さん、これだな」と思いました。そういう意味では、対決型じゃない、物すごく勢い込んでいるんなことをやるということはない、英語でチップス・オン・ショールダーズと言うでしょう、何か西部劇にある威張って相手にかっこう付けてやるという態度とは、およそ縁がない。それがまた、カーター大統領なんかも非常に好きだったんじゃないかと思うのです。逆にキッシンジャー氏なんというのは、おそらく大平さんのああいう態度は曖昧だ、というふうに取ったんじゃないかと思えます。

——それでもないんですよ。キッシンジャー氏も、大平首相にインプレスされたということを書いているのもありますけどもね。

菊地 ただ、キッシンジャー氏は、第二次オイルショックの時に来て、「日本はとに角、イランからの石油輸入をやめる」とか何とか言う時も、大平さんは最後まで承知しなかつたですからね。だか

実  
ら、キツシンジャー氏は尊敬はしたかも知れないけども、そういう気持ちは持ったと思えますよ。  
就  
——だから、そういう意味で言うと、菊地さんはずうっと一八年間、大平さんを見てこられて、一  
華  
番、最後の段階で、成長した大平さんを見るわけですね。メキシコのケースもそうですが、つまり総  
去  
理大臣になっても、敢えて交渉をまとめないで、交渉を打ち切る。だから、そういう意味では、悟り  
の境地という、そこへ行ってたんじゃないのですかね。

菊地 これは日本の外交の片隅にいた者として、私はやっぱり日本の政治家に期待したいことなん  
ですよ。日本の政治家というのはね、外交交渉というのは必ずまとめなくちゃいかん、それから役人  
が交渉する時も、交渉を妥結させない役人というのは落第なんです。何だ、お前、行ってまとめな  
かったのかと言って。まとめるといことが、何か政治家にとつては最高善なんです。これは外  
交の当事者としては、一番、困ることなんです。外交交渉によつては、ぶっ潰したほうがいいとい  
ことも多いわけですよ。これを初めて実践したのが大平さんであり、その後やったのは、僕の知る限  
り、細川（護熙）さんです。あれは自動車の輸入数値目標を言ってくれと言われた時に、「ノー」と  
言ったのです。あれが、本当の外交なんです。ところが、あの時の日本の新聞はどうですか。失敗  
だとい、「大人の関係だ」と言ったのは、しゃらくさいと。それは日本のジャーナリズムを含めて  
ね、外交交渉をまとめないということは、最大の罪悪のように言うわけです。大平さんは、その加  
減を上手にした人だと。これは、全く僕の主観ですよ。つまり大平さんという人は、功名を求めない  
んです。だから、本当に平常心で最高の外交交渉をやる人でした。

（平成一一年一二月二五日、大平正芳記念財団事務所取材）